

世界の幼児教育の根本的課題

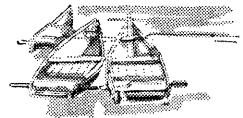
西欧、東欧、アメリカを旅行するたびに、私は行く先々で必ず幼稚園や保育所を訪ねたり、家庭での子どもの生活を見たりする。私が見た保育所と幼稚園で、特に記憶し、記録しているものは以下のところである。

まず、デンマークのコペンハーゲンにある市立の児童福祉施設の一つとしてのナースリ・スクール、ノルウェイのオスロにある市立の全日保育所とそれに隣接した幼稚園、スエーデンのストックホルムにあるナースリ・スクールとブレイ・スクール（幼稚園のこと）、オランダのライデンにある小学校と別校舎になっているインファント・スクール、ベルギーのブリュッセルにあるキャソリックの幼稚園、パリのエコール・マテルネル（母親学校）、イギリスのスコットランドのグラスゴーにあるキャソリック系のインファント・スクール、ロンドンの郊外にある公立のインファ

莊 司 雅 子

ント・スクールとナースリ・スクール、ドイツ西ベルリンのベスタロッチー・フレールベルハウスの附属キンダーガルテン、ブレメンの公立キンダーガルテン、スイスではチューリヒの公立キンダーガルテン、オーストリアでは、キャソリック系の私立幼稚園、東ドイツでは東ベルリンの国立キンダーガルテンとオーベルワイズバハにあるフレールベルの誕生の家のキンダーガルテン及び世界の幼稚園の発祥地ブランケンブルグのフレール・キンダーガルテン、チェコスロバキアではブラハにある国立の母親幼稚園。

アメリカではコロンビア大学ティージャースカレッジの附属幼稚園やデューイが創めたシカゴ大学の実験学校にある幼稚園をはじめ、その他の数カ所の公立小学校に付設している幼稚園、今年訪問したロード・アイランド州のプロビデンスにある州立大学の実験学校及びその近郊の公立・私立の幼稚園、更に帰途サンフラ



ンシスコの郊外にあるスタンフォード大学の附属ナースリ・スクール及び小学校にある幼稚園などである。アジア地域では数年前にマニラ大学教育学部の附属幼稚園を訪問した。

以上の幼児教育施設を、私は一九五一年・一九六一年・一九六三年・一九六五年および一九七〇年の数回の海外旅行中に訪問したものである。これらの幼児教育を大きく、資本主義社会の幼児教育、社会主義社会の幼児教育とに大別できるが、資本主義社会の幼児教育を更に大まかに分けると、制度上からいえば、イギリス型の義務教育制度に組まれている英米を代表とする一年保育の幼稚園がある。ここでは、五歳以下は基本的には家庭で母親が保育すべき考え方である。母親が働く場合はやむを得ず、全日保育所にあずける。幼稚園は純粹に教育事業であつて、教師と生徒とが一日二時間程度に幼児の能力を伸ばし、生活態度を指導する。次には、フランス型の母親学校のように、社会事業と教育事業という二つの使命をもち、すべて無償であり、園長と教師の給料は国から支給され、保母は自治体から給与を受け、教師の出勤前、休憩中、放課後などの時間に教師の代りをする。もちろんこの二種の職員はその必要性が認められるところのみ置かれていゝる。校長や教師、保母の他にもちろん部屋の整理や幼児の用具の世話をする職員や、給食係など、校長の任命によって従事している。このように、フランス型の幼児教育は母親学校という名称の

もとに、幼稚園と保育所の二重の性格をそなへ行なわれている。そして義務ではないから自由ではあるが、設立にさいしては国家や地方自治団体の財政的な管理統制がゆきとどき充実している。この種の型の幼児教育制度が方々にとり入れられている。

次は北欧型であるが、社会保障制度の歴史の古いこれらの諸国の幼児教育施設は、国営であろうと個人経営であろうと、いずれも国や地方自治体から財政的援助を受けている。保育所、幼稚園だけでなく、児童遊園地なども児童福祉施設の一環として設備されている。これは、特に豊かな国であるスエーデンにおいて立派な設備が施設の内外によく行なわれている。設備だけでなく、人的条件にもすぐれている。たとえば、ストックホルムの公立ナースリ・スクールを見ると、三カ月から一二月、一歳から二歳までの乳幼児グループは一人の保母につき六人、二歳から三歳までは一二人、三歳から五歳までは一五人、それに実習生が手伝い、部屋の整理の職員、炊事婦、医者、看護婦がつく。一つの保育所の規模は、三〇人、四二人、五四人といった小規模のものである。幼稚園は一日約二時間から三時間で、特別の訓練を受けた教師が指導する。一人に幼児二〇名、午前二〇名、午後二〇名と二つに分けて保育する。必ず実習生が手伝いに来る。

西ドイツは保育所、幼稚園の区別なく、いずれもキンダーガルトンと呼んでいる。そして伝統的には幼児教育は教育された母親

がやることになっている。母親がいない時のみキンダーガルテンに行かせる。そして管轄は日本でいえば厚生省になる。戦後のドイツでは、ほとんどの母親が働いているので、たいいていの幼児は朝六時から午後六時までキンデルガルテンに入れられるようになっている。もちろん母親の働く時間によって、午前中で帰る子どももいる。更にドイツでの特色か、それとも幼児教育の遅れからできたものともいえるものに、シュレー・キンダーガルテンの制度がある。ドイツではアメリカのように、幼稚園と小学校が連続していない、イギリスのように、義務教育でもない、また北欧のように幼児教育施設に恵まれていない、しかも、すべての児童は満六歳になると小学校へ入学（四月）のテストを受けなければならぬ。このうち、身体的に虚弱なもの、病気をもっているもの、知能の遅れているものは、小学校に付属しているシュレー・キンダーガルテン（小学校幼稚園）に入れられる。もちろんこの時から義務教育期間にかぞえられる。そして心身ともに健全になり、普通の学級に入れるまで、このシュレー・キンダーガルテンで教育されるわけである。

次に、社会主義諸国の幼児教育施設は、一言にいつて働く婦人のために用意されたものである。革命前のロシアなどは、上流階級の少数の子どものためにフレーベル幼稚園が開設されていた。その他若干の労働者階級のための託児所があっただけである。と

ころが革命後は婦人の働く権利と義務が憲法にうたわれているから、この婦人の労働を保証するための施設として、保育所、幼稚園が国家の力によって大々的に拡充された。家の外で仕事をする婦人労働者の子どもは無条件で保育所や幼稚園に入れる。戦後社会主義に移った東欧諸国は、いずれもこのような幼児教育施設が完備されている。私が訪問したブラハの母親学校を見ると、母親の働く時間（六時間）だけ子どもが来ている。その教師や保母も六時間勤務であるから交代制になり、母親学校は一日中開校している。国立であるから、人的条件は資本主義諸国の未だ追隨できないところである。

以上制度面からみたが、次に教育の内容方法の面からみてみると、世界の幼児教育はフレーベル型かモンテッソリ型、更にはその両者をとり入れている中間型が見られる。大まかに見て、プロテスタント系（新教）の幼児教育はフレーベル型、キャソリック系（旧教）の幼児教育はモンテッソリ型である。もっと大胆にいつてしまえば、ラテン系はモンテッソリ、アングロサクソンやゲルマン系、スラブ系はだいたいフレーベル型をとっている。

私の見た範囲内では、フレーベルの保育所や幼稚園は幼児にもっと多くの創造の自由を与えている。モンテッソリのは決められた範囲内での創造の自由のみがあたえられている。フレーベル型の教師は幼児の無限の能力を伸ばさんと願い、モンテッソリ

型の教師は一定のわくに幼児をはめたがる。フリーベル型の教師は幼児の行儀に寛大であり、モンテッソリ型の教師は幼児の行儀をきびしくしつける。フリーベル型の教師は幼児のために環境を用意して幼児自らに学習させ、モンテッソリ型の教師はいかに幼児を教えればよいかに苦心する。フリーベル型の教師はあまり幼児を教えない。モンテッソリ型の教師はよく幼児を教える。フリーベル型の幼児は活動的であるが、モンテッソリ型の幼児は物静かである。フリーベル型の幼児の作品は変化に富んでいるが、モンテッソリ型の幼児の作品はやや型にはまったものが多い。フリーベル型の幼児は創造的であり、モンテッソリ型の幼児は模倣的である。

以上、世界の幼児教育を見て感じたことを述べたに過ぎない。ところで制度を異にし、方法を別にしても、そこには共通の問題がみられる。それはやがて二十一世紀を動かしていくべき今日の幼児のための教育のあり方に関する問題である。今日の幼児は二〇年前の幼児よりもっと多くのことを知っている。またもっと多く知ろうとしている。しかし幼児は何を知ることができるのかまた何を知るべきかについては、われわれ教育者は必ずしも十分に知っているとはいえない。私どもはややもすればおとなの規準で幼児の活動を理解したり、知るべき内容を決めようとしたりしてはいないだろうか。幼児の製作や描画や積木遊び、ごっこ遊び

の中に、幼児は知っている多くのことを表わしており、更にそれ以上のことを知ろうと求めている。したがってわれわれはこれらの幼児の発達を導かなければならない。つまり幼児の先頭に立つて彼らを指導しなければならない。

しかしその前にわれわれはまず幼児を理解し幼児と共に歩むことを学ばなければならない。こうすることによって幼児をして幼児の世界に十分に生活させ、活動させることができる。

このように幼児について生きること、幼児の先頭に立つて幼児を導くこととの二重の仕事が世界の幼児教育者に共通に課せられている課題であると思う。そしてこの共通の課題の解決のために世界各国の幼児教育者は共通の努力をはらっているということが出来る。言葉をかえていうならば、いかなる制度のもとに、いかなる施設や設備で、またいかなる内容と方法とで、独立せる一人の人格としてのすべての幼児を、一人残らず幼児らしく生活させることができるか、という根本的課題が世界中の幼児教育関係者に課せられている。そしてこの課題解決を疎外しているものは何か、それからの解放をいかにすればよいか、つまり貧困にあえぎ、文化文明に恵まれない環境の幼児をどうすればよいか、また逆に科学技術の高度の進歩のために、幼児の本来の発達が疎外されている点をどうすればよいか、これらのことなど、世界のすべての幼児教育者に解決をせまられている問題であると思う。